馬耳東風

3月11日の東日本大震災で被災された方々，ならびに福島第一原子力発電所の事故により避難を余儀なくされた方々に衷心よりお見舞い申し上げます．

私は敗戦の翌年4月，上海から両親の故郷である徳島県に引き上げて来た．その年の12月21日未明，昭和南海地震が起きた．私は父親に毛布でくるまれ，抱っこされて外に出たが，住んでいた家が右に左に大きくユッサユッサ揺れているのを今なお鮮やかに記憶している．小学校時代には先生から当時の津波がどのように押し寄せてきたか聞かせられた．以来，津波は恐ろしいものだという知識はあった．また後年，三陸海岸地方を旅したとき，明治時代に三陸を襲った津波の記念碑の碑文を読んで，やはり津波は怖いものだということを改めて教えられた．しかしどうも「百聞は一見に如かず」で，実感に乏しかったのではないかと考えざるを得ない．今回の津波のニュース映像を見るにつけそう思うのである．

記録文学の泰斗吉村昭は，「三陸海岸大津波」（原題「海の壁」1970）という本を書いている．今から40年以上前のことである．震災後初めて本書を読み，複雑な思いにとらわれている．吉村は毎年のように三陸海岸にある岩手県田野畑村を訪れ，行き帰りに他の地域にも足を運んでいたが，そのたびに三陸沿岸にある防潮堤に違和感を憶えたという．彼は本書執筆の動機を次のように書いている．『……海に向かって立つ異様なほどの厚さと長さをもつ鉄筋コンクリートの堤防に眼をみはる．三陸海岸が過去に何度も津波の被害を受けているということはいつからともなく知っていたし，堤防が津波を防ぐためのものだということにも気づいていた．が，その姿は一言にして言えば大袈裟すぎるという印象を受ける．……防潮堤は，呆れるほど厚く堅牢そうにみえた．……私が三陸津波について知りたいと思うようになったのは，その防潮堤の異様な印象に触発されたからであった．……』このように描写されている防潮堤をもってしても今回の津波には無力であったという事実に私は心底驚いた．天災というのは時に人知をあざ笑うもののようである．しかし，原発事故の方は，明らかに人災であろう．「東京に原発を！（広瀬隆）」，「原子力神話からの解放（高木仁三郎）」等，原発事故について注意を喚起する人たちの言葉に当事者たちがもう少し謙虚に耳を傾けるべきではなかったかと残念に思う．原発事故では，動物も大きな被害を受けている．ボランティアによる伴侶動物の救出等，心が慰められる報道もあるが，全く報道されない悲劇も数多いと想像される．知人が関係している養豚場では，肥育豚9,000頭をそのままにして，避難命令に従わなければならなかったそうである．

震災のニュースの陰に隠れてしまったが，昨年は宮崎県で口蹄疫が発生し，29万頭もの家畜が殺処分された．被害に遭われた農家の方々に改めてお見舞い申し上げたい．津波が今後も襲って来るように，口蹄疫や鳥インフルエンザは今後も必ず発生する．しかし家畜伝染病は天災ではない．発生は防げなくても蔓延は最小限度にとどめることができるはずである．それには殺処分と死体の焼・埋却をきわめて迅速に実施することが不可欠である．昨年われわれはこのことを十分学んだはずである．現行の法律では殺処分された家畜の処理は家畜の所有者が行うとされているが，口蹄疫のような重要家畜伝染病では国の責任において行うと改正しなければ，迅速な処分は不可能であると考えるがいかがであろうか．われわれ獣医師は，原発事故を他山の石としなければならないと強く思う．（久）